

令和7年度 北杜市立武川小学校 校内研究の概要

1 研究主題・副主題

主体的に学びに向かう児童の育成

～学びをつなぐ授業づくりをめざして～

2 主題設定の理由

21世紀の社会は知識基盤社会の時代といわれ、新しい知識・情報・技術の価値が高まり、社会の変化に主体的に向き合い、自ら問いを立てて他者と協働しながら問題を解決する「生きる力」を育むことが求められている。令和3年1月の中教審答申では、令和の日本型学校教育の構築を目指して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実により子ども達が主体的に学びに向かう必要性を打ち出している。また、山梨県学校教育指導指針では、確かな学力の育成として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善及び評価に取り組み、新しい時代に必要な資質・能力の育成に努めることに言及している。

本校では、学校教育目標に「よく学び 心身ともに 健やかな児童の育成」を掲げ、さらに目指す児童像として「夢や目標をもち、自ら学び続ける子ども」「人や自然を大事にする、心豊かな子ども」「気力と体力を備えた、たくましい子ども」の三つの児童像を設定している。研究主題の「主体的に学びに向かう児童の育成」の実現は、「よく学ぶ子ども」や「自ら学び続ける子ども」の育成へと結びつくものである。

本校の児童の実態として、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返り次につなげる「主体的な学び」の実現に課題があると考える。これまで7年間の校内研究では、「主体的・対話的で深い学び」について研究を続けてきた。主体的に学ぶ児童の育成に向けて「深める問い」「導入の工夫」「学習者を主体とした個別最適な学び」「一人一台端末の有効活用」に着目して理論研究、授業実践を行ってきた。

研究を7年継続してきた成果として、パソコンの扱いに慣れ、授業の中で活用できる子どもが増えてきたことがあげられる。この点に関しては、他者と関わり合いながら主体的な学びにつながったといえる。一方で、自分の考えを論理立てて発表したり、文章で表現したりすることに課題があることが明らかとなった。そこで、これまでの研究を土台として、ツールとしてのICTを有効的に活用したり、児童と児童、児童と教師、児童と家庭等、他者とつなぐ教師の関わりを具現化したりしながら主体的に学びに向かう児童を育成していくことが必要であると考える。児童自身が主体的に学習に向かう態度を育てるためには、児童主体の授業づくりが求められる。それを「学びをつなぐ授業」と捉え、教科横断的な学びや、協働的な学びの充実を図るとともに、本校児童の実態から基礎的基本的学力を定着させることも必要であると考える。